

「わたしの正月は、おとうさんに殴られなきゃ終わらないの」娘たちに訴えることがあった。不思議なことは、郁子も娘たちも、(喉元過ぎれば、熱さ忘れる)ことわざ通りの性分だった。郁子は、誠に対して怒りを抱きながら、その怒りを表に出さず曖昧な状態で暮らしていた。

ある年の正月、誠が拳を振り上げたとき、
「殴ってごらん、もう許さない。もう、決して許さない」突き飛ばされた場所で嘔を上げて叫んだのだった。郁子はどんな形相だったか。誠はそれからびたっと殴らなくなった。

今年、元旦になって誠はふたりの娘たちとおせちで正月を祝ったはずだった。年の暮れに郁子の実家から、郁子の父親の容態が悪いと知らせてきた。郁子ははじめて正月を留守にした。

娘たちは二日になると母親に電話をかけてきた。

「——酔っぱらっているのよ、おとうさんが」「わたしたち、食事も出来ない。座敷から動いてくれないんだもの」「家中、酒のにおいでムンムンしているわ」

せっかくの正月なのにちっとも楽しくないと、娘たちはこもごも電話口で父親をののしった。三日の午後、娘たちが父親を家に置いたまま郁子の生家にやってきた。郁子は入れ替わって大阪行の列車に乗った。

「おじいちゃんの入院まで、わたしたちがここにいろわ」姉妹は晴れ晴れした表情で郁子に手

看護婦が三言に

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

「看護婦が三言に我、問曰三」

均ならしの神様

